

ボーダースタディーズ・サマースクール参加記

千須和 里美（北海道大学大学院文学研究科スラブ社会文化論専修・M1）

ボーダースタディーズ・サマースクールは、得るものの多い充実した 5 日間だった。講義で取り扱われたトピックは、ボーダースタディーズへの導入に始まって、国境を超える移民や環境問題、ある国の中での民族や国籍に基づく見えないボーダーまで多岐にわたった。講義を聞く側の参加者の前提知識は人それぞれで、講義の内容が自分の研究テーマに近く、十分に前提知識があることもあれば、まったく馴染みがなくどんなに必死に聞いても理解しきれないこともある。だが、理解度に差がある中であれ、多様なトピックに向き合わねばならないという点もサマースクールの魅力の一つであるように感じた。たとえば私はロシアと EU の国境通過の問題に関心があるので、国境の役割や EU での人の移動についての話が非常に興味深く、講義をすんなりと理解した上で、講師の先生方にさらに掘り下げてお話を伺うことも多かった。どの先生もとても親切で、もしさらに関心があるのなら、と、読むべき関連研究を紹介してくれることもあった。その一方で、講義で扱う地域がアジアになりトピックが一国内の民族の話になると、私は正直ついていくのがやっとなでとてもとても質問どころではなかった。それでも、必死についていってなんとか理解できた範囲で、新しいことを知って考えるのは意義のある経験だったと思う。

最終日のエクスカージョンでは、アイヌ民族博物館「白老ポロトコタン」などを訪れた。伝統楽器ムックリを心地よく鳴らして、優しい味の伝統食に感動して、霧がかかって幻想的な湖畔をのんびりと歩く時間はとても素晴らしかった。ポロトコタンを散策していたとき、海外からの参加者にこう聞かれた。「私はアイヌという言葉でさえこのサマースクールで初めて聞いたが、日本人のあなたはアイヌについてどれくらい知っているのか、またここにきてどう感じたかを知りたい。」たしかに彼に比べれば、私はアイヌのことを元々ある程度知っていたと言えるだろう。常識程度に少数民族の存在は知っていたし、日本史で出てきた和人とのかかわりもなんとなく覚えていたし、あとは昔読んだ漫画『シャーマンキング』から多少イメージが湧くぐらいには知っていた。その状態で、エクスカージョン前日の講義で現代のアイヌ民族が抱える問題について聞き、日本社会の中の見えないボーダーをほんの少し意識した。だが、その程度だ。「最低限は知っていたけれど、リアリティを感じたのはこれが初めて。」自国内のボーダーについて、外国からの参加者たちと共に考えるのは有意義な経験だったと思う。次に聞かれるときには、もっと深い答えを返したい。

サマースクール全体を通して、多くの知識を得ただけでなく共通言語としての英語も鍛えられ、そしてなにより国内外の多様な参加者と交流を深めることができた。サマースクールが終わってもうすぐ 1 か月になるが、今でも研究テーマが重なる先生にはメールで相談にのっていただいております、仲良くなった海外の学生ともよく連絡を取っている。また来年のサマースクールで会える日が楽しみでならない。

池先生、岩下先生、講師の先生方、スタッフの方々、参加者の皆様、貴重な 5 日間をありがとうございました。



グループプレゼンの準備をする千須和さん（前列、中央左が千須和さん）



プレゼンを行う千須和さん